

乳児保育におけるトラブルの要因とその解決に関する研究

研究代表者	森本 信也	（明和ゆたか保育園園長）
共同研究者	田中 哲郎	（久留米大学客員教授）
	大西 宏幸	（柳町園園長）
	志賀口 大輔	（なごみ保育園園長）
	辻 健二	（川崎愛児園園長）
	落合 陽子	（かほる保育園園長）
	三角 岳生	（たんぽぽバンビ保育園園長）
	浅香 聡彦	（大徳保育園園長）
	堀 昌浩	（さくら第2保育園園長）
	吉岡 伸太郎	（おひさま保育園園長）
	竹内 勝哉	（秋和保育園園長）
	永瀬 時久	（ぼだいじ保育園園長）
	高山 静子	（東洋大学准教授）
	細田 直哉	（聖隷クリストファー大学助教）
	相沢 康夫	（百町森おもちゃデザイナー）

研究の概要

トラブルが起きた保育環境について20箇所の民間認可保育園からアンケート調査し独自に数値化を行った。そのアンケート結果に基づき3か月間に及ぶトラブルの発生件数や内容を調査し、それぞれの保育園における環境とトラブルの因果関係を分析した。さらに、保育内容（環境）の特徴が異なり、トラブル件数が少なかった3つの保育園をビデオカメラでモニタリングし保育環境が乳児の行動にどのような影響を与え、またどうトラブルと結んでいるのかの検証を行った。

- ① 全国のおよそ20か所の民間保育園を対象に期間を定め（3か月間）、引っ掻き噛みつきなどの乳児による対人関係トラブル発生件数並びにその状況や事故当時の環境に関するアンケート調査の実施。
- ② それらのアンケートをもとにトラブル発生時の状況や事故当時の環境をデータ化し集計することで多角的に検証を行った。
- ③ 特にトラブルの発生件数の多い1歳児クラスに限定し、保育内容（環境）が異なる4つの保育園においてモニタリングする。モニタリングはビデオカメラを使って行う。内容は、トラブルの発生頻度が高い午前中の室内遊び時間とそこから生活時間（食事、午睡、排せつ）へ移行する連続のなかで環境とそれが子どもの行為行動に与える影響を検証した。

それらの検証結果から乳児保育における安心安全でより快適に生活できる保育環境を研究した。

・アンケート1回目は0歳～2歳までのひっかき・かみつきの状況の詳細および発生時の保育室の状況と環境を中心に作成したトラブルシートで発生事故件数からの調査を行ったがその結果、調査園ごとの各園児一人あたりの面積・保育士配置での危険値が数値化することができトラブルの起こりやすい年齢を特定できた。

・2回目に行ったアンケートは、一人あたりのおもちゃ（物）の量の調査と乳児を担当している保育士の意識調査を行った結果、一人あたりのおもちゃ（物）の量とトラブル件数によって危険値を数値化することができたが、保育室内の物的環境の量がかみつきの直接的な要因と実証できる調査とはならなかった。

・3回目の調査として、これまでの調査結果の数値では見えてこない、保育士の子どもへの関わり方や配慮及び保育の方法などを電話にて各園に直接聞き取り調査を行い、そこから一斉保育型と育児担当型の保育形態の類型に分けて保育士の関わり方からの事故の要因検証を行った。

アンケート計3回の調査を分析して、0～2歳児までの年齢の中で、1歳児のトラブルが多い、一斉保育型・育児担当型の保育形態によるトラブルの差は少ない、保育士配置数によるトラブルの差は少ない、面積・おもちゃの数によってのトラブルの差は少ないなど、日々の乳児保育においてのトラブルには物的環境の内容だけではなく、保育の質を構造的に検証する中で、様々な複合的な要因が考えられる結果に至った。

今回の研究を通していえることは、保育の方法や形態に関わらず、いかなる保育園においても乳児保育の中では対人関係においてトラブルが起こり得る可能性があるということがいえる。さらに保育園での生活の中では、子どもたちの置かれる環境の変化や違いによってトラブル発生の頻度が大きく左右されるということも見られた。中でも物的環境そのものがトラブルを起こりにくくするののかということではなく、物的環境が子どもたち自身に合っているかどうか環境設定をしていく上で大切であり、そのためには人的環境の物的環境への的確な働きかけが必要不可欠であるということが推測できた。

キーワード：保育現場の人と物、一斉保育型と育児担当制型、かみつかなくてもいい保育、かみつきを防ぐ保育、環境プラス

はじめに—問題意識の所在—

保育所における子どもの引っ掻きや噛みつきなどのトラブル（以後トラブルとする）は、乳児保育を担当する保育者にとって大きな悩みの種である。これらのトラブルは、噛みついた子と噛みつかれた子それぞれに対するケアはもちろん、保護者への対応も必要となるケースがほとんどだからである。

ところが、これらの問題が集団保育の現場において例外的ではない事象であるにも関わらず、その研究はほとんど進んでいないか、あるいはなされていないように思われる。その主な要因は3つほど指摘することができる。第一に、トラブルの多くが乳児期に集中する性質が挙げられる。引っ掻きや噛みつきは乳児期における一過性の行為であって、幼児期になると子どもの発達そのもので解消されてしまうことから、問題意識が継続しにくいという傾向がある。第二に、対象が未成熟な乳児であるため、その内面を自身で言語化することが困難であり、客観的な原因などの積み上げがしにくいことから、研究自体に困難性がある。第三に、トラブルが子どもや保育所の固有ケースであり、怪我の程度も子どもの健康を阻害することのない軽度なものであることから、記録などに残りにくく、その頻度や全体に占める割合といった全体像の把握が難しくなる。

そのため、これらの問題に対する取り組みは、主として保育所という現場において独自に行われてきた。もちろん、保育士会をはじめ各種団体の研修会等でも取り上げられることがあるが、そこでの研修テーマは保育者にとっては保育実践的なものであるため、発達の特徴としての理解や内的傾向の発露として、子どもの気質や性格、またはそれに大きな影響を与える家庭環境への働きかけ

の重要性を説くものや、引っ掻きや噛みつきに対する保育者の対応に関するものなど、事象の分析や事後の方法論について検討されるものが大半となっているのが実情である。

先行研究として行われている北九州保母会を中心とした研究グループの「保育所児におけるかみつきの研究」^(注1)や、それをさらに推し進めた光沢寺保育園と宇部短期大学が行った研究^(注2)においても、上記の範疇を超えるものとはなっていないように思われる。後者の研究における子どもの「密度」^(注3)への注目は、非常に興味深い視点ではあるが、「密度」の緩和に対する示唆が抽象的なため、保育実践とは結びつきにくいように思われる。

これらの結果として、多くの保育現場では、すでに定式化されている心理学的な解釈と手法に基づき、対人関係のトラブルは乳児の不安定な内面が社会化したものであると捉え、その予防や解決の優位性は、子どもに対する言語による知覚の促しや家庭環境の改善といった社会性を育むことに力点が置かれ、そこに解決の糸口を見出すことが大勢となっている。もちろん、愛情不足や子どもの未成熟な社会性と高い衝動性を結びつけて考えることには一定の正当性が認められ、例えば、保育者による愛情の補完や「しつけ」として子どもの社会性を育むといった対応が時として非常に効果的に働くことも十分にあり得ることである。

しかし、それらの対応に効果があるといって問題の要因についてそれ以上考えないという態度は、トラブル因子を子ども自身や家庭など保育園の外的因子に限定してしまっ、保育所側にもあるかもしれない問題要因を見過してしまいかねない態度であり、その先入観こそが問題の本質から私たちを遠ざけている可能性もあるのではないだろうか。現に多くの保育所で恒常的に乳児のト

ラブルが発生していることや解決に至らない事例が多数存在していることが、このことを裏付けているように思われる。

そこで私たちは、「乳児保育におけるトラブルの要因とその解決」に関して、従来の子どもからの視点からではなく、トラブル発生 of 積極的な要因が保育環境自体にあると仮定してアプローチを試みることとした。保育環境とは、文字通り保育所の物理的環境と人的環境を示し、乳児の人数、保育者の人数、あそびの環境（場所や面積、おもちゃの数など）等について、14か所の民間認可保育園をアンケート調査し、独自に数値化を行った。その上で、20か園の3か月間（平成24年4月～6月）に及ぶトラブルの発生件数や内容を調査し、それぞれの保育所における環境とトラブルの因果関係の分析を試みた。さらに、保育環境（内容）の特徴が異なるトラブル件数の少なかった3か園についてビデオカメラでモニタリングし、保育環境が乳児の行動にどのような影響を与え、トラブルとどのように結びついているのかについて考察した。

これらの結果から、トラブルが起りにくい環境とトラブルが起り易い環境を割り出して、その普遍性を抽出し、子どもはもちろん保育者にとっても安心安全な保育の場の構築へと繋げていくことが本研究の本義とするところである。私たちは、まず何よりも保育に従事する者として、保育並びに保育環境を改善することが責務であると考え、未成熟な乳児がより安定的生活ができるようになり得ると信じ、ここに記す内容が、少しでも日々の保育に従事する現場の保育者の方々の参考になればという思いで本研究に取り組んだことを付け加えておきたい。

調査研究のプロセス

- ① 全国20か所の民間保育所を対象に期間を定め（平成24年4月～6月の3か月間）、引っ掻きや噛みつき等の乳児による対人関係トラブルの発生件数並びにその状況、トラブル発生当時の環境に関するアンケート調査を実施した。調査項目は、トラブル発生日時、トラブル内容、トラブル発生場所、怪我の状況、加害乳児の生年月日、入園年月日、性別、トラブル発生時の児童数、職員の定数及び職員配置数、担当保育士の経験年数、室内玩具の量である。
- ② ①のアンケートを基に、トラブル発生時の状況や環境をデータ化して集計することで問題を多角的に検証する。
- ③ 特にトラブル発生件数の多い1歳児クラスに限定して、保育環境（内容）が異なる3か園をモニタリングする。モニタリングはビデオカメラを使用し、トラブル発生頻度の高かった午前中の室内遊びから生活時間（食事・午睡・排泄）へと移行する時間帯について、その時の環境（変化）が子どもの行動に与える影響に

ついて考察する。

- ④ 検証結果から、乳児保育における安心安全でより快適に生活できる環境について検討する。

第1章 データの検証

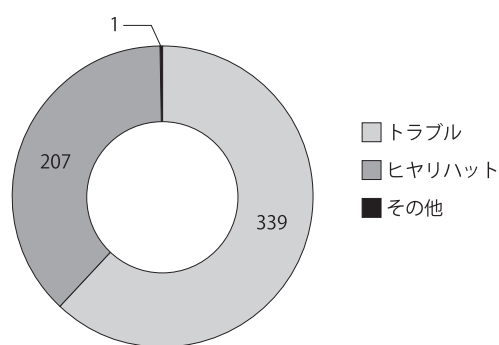
1 トラブルの割合

今回の調査では、全国20か所の民間保育所における平成24年4月、5月、6月のトラブル報告書及びヒヤリハット報告書の示す内容について、独自の項目、基準を用いて整理している。

はじめに、この研究における「トラブル」とは、複数の園児が関係するトラブルの中で怪我の有無、程度に関わらず接触を伴ったものを指している。したがって、一人で歩行中につまずいて怪我をしたといった事例は含まれていない。また、保育者による関わりなどによって未然に防ぐことができたが、トラブルの可能性を含んでいたと推定できるものについては「ヒヤリハット」という分類にカウントしている。

今回の調査での対象園におけるトラブル及びヒヤリハット等の総計は547件であり、そのうちトラブルが339件、ヒヤリハットが207件、その他が1件であった（図1）。

【図1】トラブルとヒヤリハットの割合



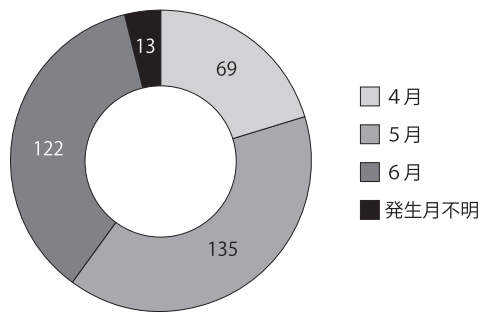
トラブルとヒヤリハットについての割合はほぼ3：2であり、3回のトラブルに対して2回は未然に防ぐことができていることを示している。

そして、当然のように思われるかもしれないが、今回調査した20か園すべてで、園児同士の接触を伴うトラブルが発生しているという事実を確認することができた。つまり、このことは保育現場において、引っ掻きや噛みつき等のトラブルは、量の多少はあっても例外的な事象ではないということを裏付けていると思われる。

2 月別のトラブル発生件数

次に、データの種類を「トラブル」のみに絞って月別

【図2】月別トラブル発生件数



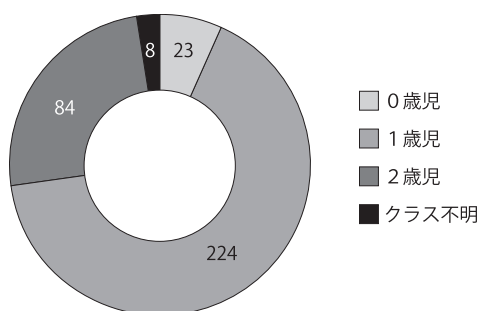
に集計したところ、339件あったトラブルのうち、4月が69件、5月が135件、6月が122件であった（図2）。

今回の研究メンバーによる意見交換においては、4月のトラブル件数が他の月に比べて少ないのは、4月はほとんどの保育所にとって新年度の始まり、入園、進級の時期であり、園児たちは、新入園児も進級園児も、新しい保育室や保育者に慣れるまで行動を抑制する傾向が見られることがあるため、そういった子どもの心理的な特性が表れた結果ではないかと考えられた。反対に、5月以降のトラブルの増加については、子どもたちが新たな保育環境に慣れ始め、自分の周囲に興味が向いていくことから、他者との関わりやモノや場所の所有といった意識（我）が出始め、トラブルの要因となっていくのではないかと考えられた。

3 年齢別・月齢別のトラブル発生件数

次に、年齢別の発生件数を集計したところ、0歳児が23件、1歳児が224件、2歳児が84件となった（図3）。1歳児のトラブル発生件数が圧倒的に多いというこの結果は、これまでの先行研究^(注1)や保育所で広く認識さ

【図3】クラス別トラブル発生件数



れている通りのものであった。

1歳児のトラブル発生量は全体の66%にのぼっている。これは、「探索行動の広がり」、「独占欲求の高まり」などの1歳児の発達特性が、他者と関係する行動やトラブルを誘発する行動の割合を高めるからではないかと推測できる。それとは反対に、0歳児については、自分自身で歩行ができる子どもの割合も限られており、保育者以外の他者との関わりは少ないため、トラブル件数も非常に少ないのではないかと推測できる。また、84件のトラブルが報告された2歳児については、クラス構成の中で月齢の低い子どもが在籍している割合が多ければ、本質的に1歳児の状況と変わらないものであるといえる。

そこで、さらに詳しく、トラブル発生時における対象児の月齢を、誕生日と発生日時から集計したものが上の（図4）である。図を見れば、0歳後半から徐々にトラブル件数が増え始め、1歳6か月前後に最もトラブル数が増加していることがわかる。また、1歳3か月から2歳5か月の約1年間についてはすべて10件を超える結果となり、生後6か月から3歳頃までの約3年間の中で最もトラブルが起きやすい時期と捉えることができる。さらに、2歳10か月のあたりでトラブル数が激減していることから、一般的に2歳児クラスの年度前半頃まではトラブル発生頻度の高い時期と捉えることができ、保育所の中で最も関係性のトラブルが起りやすいのは1歳児クラスであると認識して良いものと思われる。

4 時間帯別のトラブル発生件数

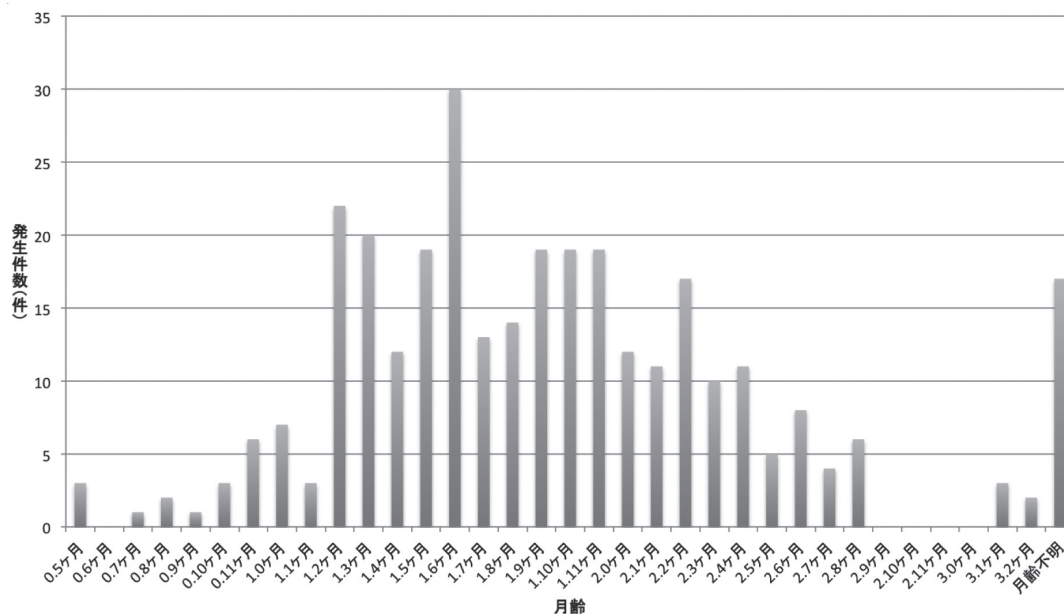
さらに、保育中にトラブルが起きやすい時間帯についても検証してみた。すべてのトラブルの発生時間を1時間毎に区分して集計したものが下の（図5）である。

1日の中で最もトラブルの起きる時間帯は午前10時からの1時間であることがわかる。この時間帯は、0～2歳児クラスにおいては一般的に活動から食事、食事から午睡へと流れる時間帯であり、前後にももう少し時間の幅をとって見てみると、午前間の食や手洗い、排泄なども含まれており、子どもの動線が一日の中で特に複雑な時間帯である。また、保育士にとっても、食事の準備、布団敷き、排泄や着脱の補助など、特に業務が重なる時間帯である。

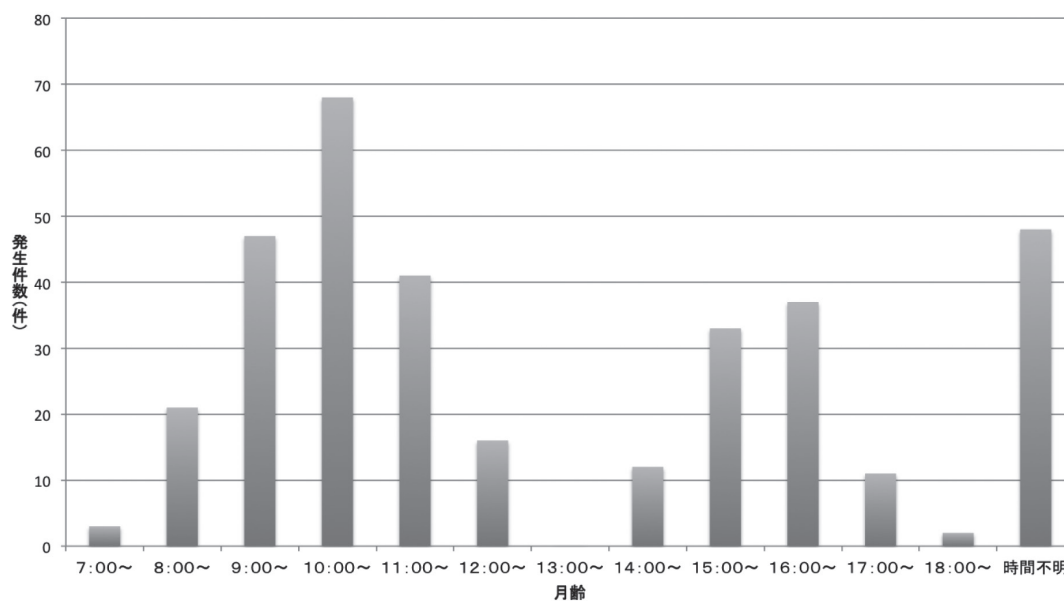
（図5）からも分かるように、この午前10時からの1時間を中心として前後の1時間ずつを合わせた午前9時から12時までがトラブル発生のコアタイムであると考えて良さそうである。

グラフから読み取れるもう一つの山は、一般に午睡明けから午後間の食、降園準備へと流れる午後2時から5時までの時間帯である。この時間帯は、保育所によっては徐々にクラス内の人数が減ってくる時間でもあるため、時間が進むにつれてトラブルの発生数は減少していくが、園内への保護者の出入りもあり、子どもたちの情緒が安定しにくい時間帯であると考えられる。

【図4】月齢別トラブル発生件数



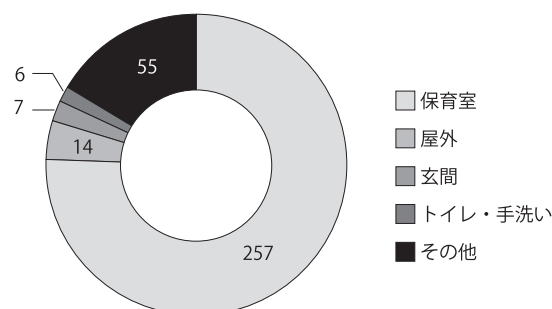
【図5】時間帯別トラブル発生件数



5 場所別のトラブル発生件数

最後に、トラブルの発生場所についてデータ集計を行ってみたところ、保育室内でのトラブルが圧倒的に多いことが判明した（図6）。保育室でのトラブル発生の割合は全体の75%を超え、接触を伴うトラブルの4件に3件は保育室で発生していることになる。一般的にトラブル発生リスクが高いと想定されやすい屋外における転倒等の単独トラブルについては今回の研究データからは除外されているが、基本的に屋外の保育環境のほうが保育室よりも広いであろうから、必然的に子どもの密集度は下がると考えられ、接触を伴うトラブルの要因の一つと考えられる接近状態が比較的生まれにくいということは

【図6】場所別トラブル発生件数



指摘できる。

とくに1歳児について考察を加えると、歩行機能が安定し、広い空間を自由に動き回るところに屋外活動の魅力を感じる子どもが多く、その一方で、集団遊びが充実してくる時期としてはまだ早い段階であるため、衝突等の偶然に起こるトラブルはあるとしても、密集度が低く接近状態が生まれにくい屋外遊びにおいてはモノや場所の取り扱いなどは発生しにくいのではないだろうか。

いずれにせよ、この結果からは、関係性を伴うトラブルが起きやすい場所として保育室がその現場となっていることが殆どであることが判明した。

6 データ検証の総括と追加アンケート

ここで、5つのデータ検証から明らかになってきたことを整理してみたい。

まず、0～2歳児における園児同士の接触を伴うトラブルは例外的なものではないこと。また、こうしたトラブルの中には防ぐことができるものとそうでないものが存在すること。すなわち、すべてのトラブルが対応不可能なものではなく、人的環境、物的環境による課題解決の可能性が見えること。

次に、調査をした3か月から、新たな環境に移行した当初よりも子ども達の適応が進み出した時期にトラブルも増加する傾向にあること。また、年齢および月齢に関するトラブル件数の検証の中では、従来の定説通り1歳児クラスで最もトラブル発生リスクが高く、月齢では1

歳3か月から2歳5か月頃まで継続的にトラブル発生率の高い状態となること。

時間に焦点をあてた場合には、午前9時から12時までの3時間が最もトラブルの起きやすい時間帯であり、場所に焦点をあてると、トラブルの多い場所は屋外ではなく保育室内であること。

以上の整理から、1歳児クラスの午前9時から12時までの時間帯における保育室内というのが最もトラブル発生リスクが高いという予測が成り立つ。そこで、この三つの条件が重なった時の各保育所の保育環境はいかなるものか、保育環境の違いによりトラブル件数に違いが生まれてくるのかという点について、保育環境に関するデータから何らかの結論を導き出すことが可能ではないかという仮説を立て、今回の対象園に追加アンケートを実施して、対象となるクラス及び保育室の玩具の種類および数、家具、面積、保育士配置について集計することとなった。

第2章 新たなデータの検証と新しい視点

1 1歳児クラスの保育環境

前章の最後で述べたように、この章ではトラブルの多い1歳児クラスの事例に特化して、各保育所の保育環境について検証を加えてみた。追加アンケートにより各保育所の保育環境について調査してまとめたものが表1である。

(表1) 各園の危険値と保育環境に関する値

保育園名	定員	トラブル件数	危険値	園児数 (1歳児)	おもちゃの数	一人あたりの おもちゃの数	面積	一人あたりの 面積	保育士数	一人あたりの 園児数
A 保育園	120人	1件	1.2件	16人	36人分	2.3人分	69.4㎡	4.3㎡	4人	4.0人
B 保育園	120人	2件	1.4件	26人	37人分	1.4人分	57.0㎡	2.2㎡	6人	4.3人
C 保育園	150人	3件	2.1件	27人	8人分	0.3人分	90.0㎡	3.3㎡	7人	3.9人
D 保育園	200人	3件	2.3件	25人	43人分	1.7人分	74.5㎡	3.0㎡	6人	4.2人
E 保育園	120人	4件	2.9件	26人	40人分	1.5人分	80.8㎡	3.1㎡	5人	5.2人
F 保育園	人120	4件	3.1件	24人	39人分	1.6人分	130.0㎡	5.4㎡	5人	4.8人
G 保育園	80人	3件	3.8件	15人	83人分	5.5人分	93.3㎡	6.2㎡	4人	3.8人
H 保育園	90人	5件	3.9件	24人	89人分	3.7人分	94.1㎡	3.9㎡	4人	6.0人
I 保育園	120人	4件	5.4件	14人	33人分	2.4人分	37.0㎡	2.6㎡	3人	4.7人
J 保育園	90人	4件	5.8件	13人	85人分	6.5人分	55.6㎡	4.3㎡	3人	4.3人
K 保育園	80人	5件	5.9件	16人	9人分	0.6人分	66.2㎡	4.1㎡	5人	3.2人
L 保育園	90人	9件	8.4件	20人	35人分	1.8人分	41.0㎡	2.1㎡	5人	4.0人
M 保育園	150人	5件	8.5件	11人	59人分	5.4人分	39.4㎡	3.6㎡	4人	2.8人
N 保育園	30人	8件	10.7件	14人	17人分	1.2人分	65.0㎡	4.6㎡	5人	2.8人
O 保育園	150人	12件	11.8件	19人	66人分	3.5人分	82.0㎡	4.3㎡	5人	3.8人
P 保育園	235人	16件	15.0件	20人	55人分	2.8人分	132.5㎡	6.6㎡	5人	4.0人
Q 保育園	150人	21件	19.7件	20人	46人分	2.3人分	55.8㎡	2.8㎡	4人	5.0人
R 保育園	60人	14件	21.9件	12人	44人分	3.7人分	69.7㎡	5.8㎡	3人	4.0人
S 保育園	146人	26件	27.1件	18人	38人分	2.1人分	52.0㎡	2.9㎡	4人	4.5人
T 保育園	120人	41件	51.3件	15人	68人分	4.5人分	70.2㎡	4.7㎡	5人	3.0人
平均	121人	10件	10.6件	19人	47人分	2.7人分	72.8㎡	4.0㎡	5人	4.1人

まず、「危険値」について見てみる。本研究における「危険値」とは、保育所毎に、調査期間内の3ヶ月の間に1歳児クラスで起こったトラブル件数をクラス人数で割り、園児一人あたりのトラブル件数を求めた後、各園のクラス規模の差による影響を無くす為、20か園の平均クラス人数（約19人）を掛けて求められた値である。（表1）から確認できる通り、20か園の1歳児クラスにおける園児同士の接触を伴うトラブルの平均発生件数は、人数19名のクラスにおいて約10（危険値換算で10.6）件発生するという結果が得られた。

次に、おもちゃの数について見てみる。おもちゃの数については、本研究独自のルール（別紙1参照）に基づき、各園で使用している様々な遊具の種類、用途などを根拠に、ひとつの遊具毎に「何人が遊べるか」を算出し、合計したものである。また、カウントされているおもちゃは、常に園児の手の届く場所にあるものという条件が加えられているため、普段はどこかに収納されていて遊ぶ時にだけ保育者によって出されるようなおもちゃに関しては含まれていない。今回の集計では、20か園平均で1クラスに47人分、1人当たり2.7人分のおもちゃがあるという結果となった。

次いで、面積について見てみると、全体の平均が72.8㎡、園児1人当たり4.0㎡という結果で、保育所最低基準を上回る環境を整備しているところが多いことが伺える。

最後に、保育士1人あたりの園児数について見てみると、平均で4.1人という結果が得られ、こちらについても最低基準を上回って配置している園が多いことが明らかとなった。

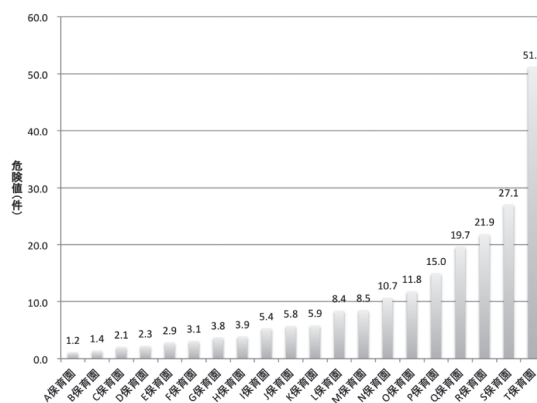
2 おもちゃの数と危険値の関係

保育環境としてのおもちゃは子ども達にとって必要不可欠なことはいうまでもないが、その量や使用方法については各保育所の理念や方針によって様々である。今回の調査でも遊具の種類の多少や絶対量の多少については多様性がみられ、1人あたりのおもちゃが最も多い園は6.5人分、最も少ない園は0.3人分であった。各園への個別インタビューから補足すると、前者の園では、保育室内に常におもちゃが配置されている状態であるのに対し、後者の園では、おもちゃを使う時に保育室に運ぶという方法を採用している。

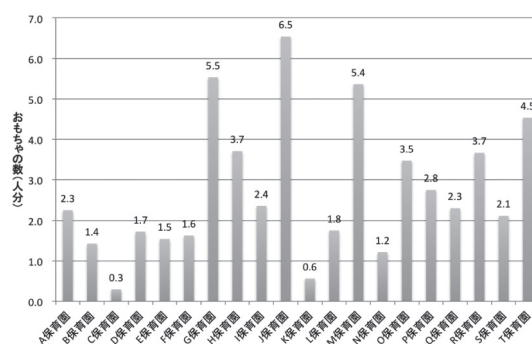
次に、1人あたりのおもちゃの数と危険値との関係をグラフに置き換えたものが（図7—1、7—2）である。グラフからも分かる通り、1人あたりのおもちゃの数と危険値には相関関係が確認できなかった。1人あたりのおもちゃの数が多くて危険値が低い園もあれば、反対に危険値が高い園もあった。同様に、1人あたりのおもちゃの数が少なくても危険値の低い園、高い園が存在しているという事実が判明した。両者間には僅かに反比例の関係があるといえなくもないが、今回のデータからそれ

を言うのはやや強引な解釈となろう。一般的におもちゃが多いほど保育環境が豊かであり、子どもも落ちつくのではないかと考えられがちであるが、このデータからはおもちゃの多少だけでそれが決定するわけではないことがわかる。

【図7—1】各保育所の危険値



【図7—2】園児1人あたりのおもちゃの数

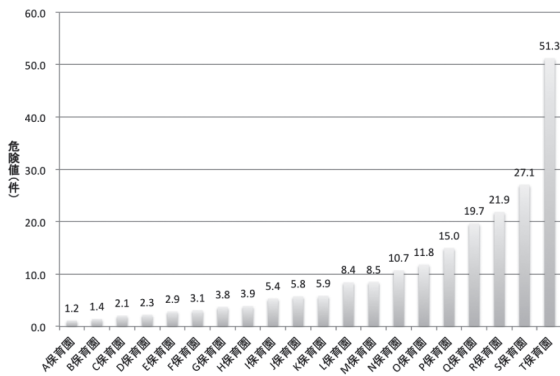


3 面積と危険値の関係

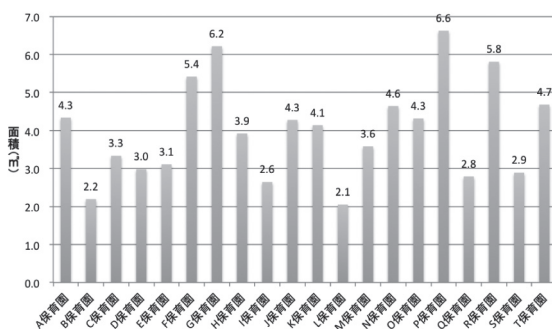
結果を先に述べてしまうと、子ども1人あたりの面積と危険値との間にも明らかな相関関係は確認できなかった（図8—1、8—2）。子ども1人あたりの面積は、最大の園が6.6㎡、最小の園は2.1㎡であった。なお、1歳児の保育室面積については、待機児童等の事情により各自治体の基準に差がある可能性があることを付け加えておく。

（図8—1、2）のグラフをみると、1人あたりの面積と危険値の間には先程と同様に明らかな相関性を見出すことはできず、1人あたりの面積の広狭だけでトラブル発生の要因とすることは控えるべきであろう。保育者は経験的に、面積が狭いと子どもが密集するためトラブルが起きやすいと考えがちであるが、今回の調査では1人あたりの面積が狭くてもトラブルの少ないケースがあり得るため、一概に広ければ安全とは言いきれないようである。

【図8—1】各保育所の危険値



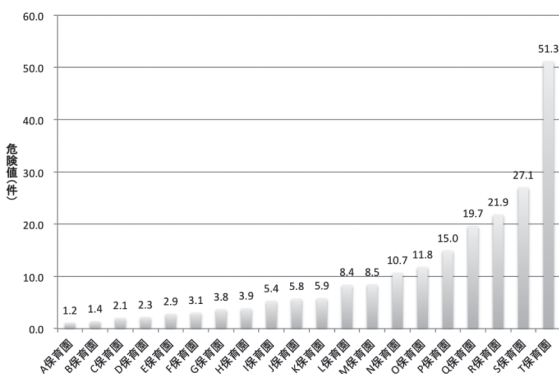
【図8—2】園児1人あたりの面積



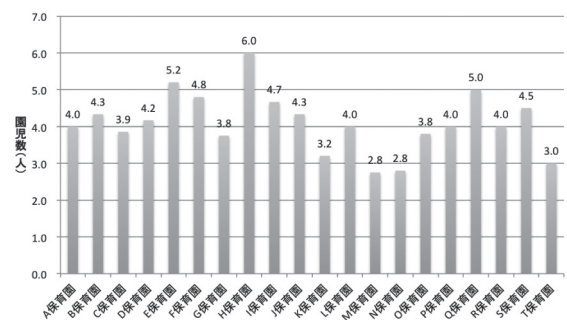
4 保育士1人あたりの園児数と危険値の関係

保育士1人あたりの園児数と危険値との関係性についても、両者の間に明確な相関性を見出すことはできなかった(図9—1、9—2)。保育士1人あたりの園児数は、最大値が6.0人、最小値が2.8人であり、各園の実態には差が見られるものの危険値との間の関係性は見出せなかった。保育士1人あたりの園児数が増えるにつれて危険値も高まっているようではあるが、その関係性をグラフ化するとその傾きは限りなく水平に近く有意なものであるとは言いがたい。保育士1人がみる園児の数にも程度の問題があるだろうが、一概に、1人でみる人数が多いと目が行き届かずトラブルが増えるとは言いきれないのではないだろうか。

【図9—1】各保育所の危険値



【図9—2】保育士1人あたりの園児数



5 保育士の意識調査

追加で実施したアンケートでは、人的環境の1つである保育士の意識にも注目している。

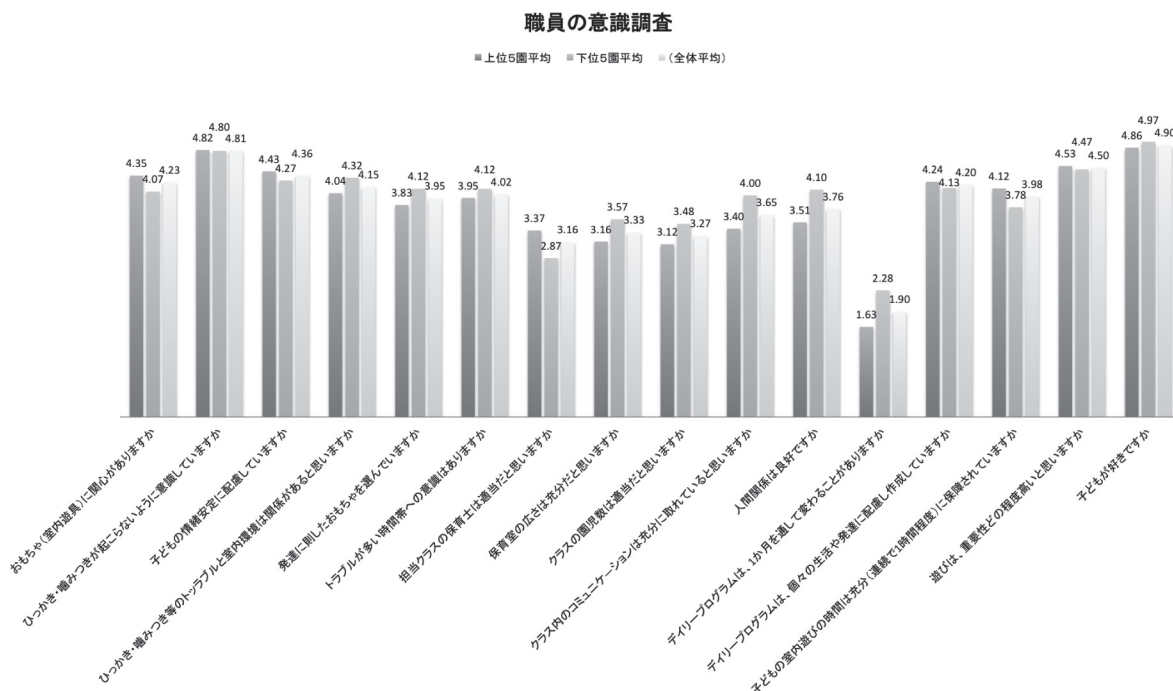
16種類の設問を設定して、「意識が高い」又は「大いにそう思う」場合には5ポイント、「意識が低い」又は「全くそう思わない」場合には0ポイントとした6段階の評価を、各園の0～2歳児クラスの担当保育士に回答してもらった。(図10)は、得られた回答から1歳児担当保育士にデータを絞った上で保育所毎に平均化し、さらに、全体の中で危険値の低い(トラブルの少ない)上位5園と危険値の高い(トラブルの多い)下位5園のデータの平均をとって比較したものである。

16の設問のうち、危険値の高低に直接結びつくようなものは見られなかったが、担当クラスの保育士数や園児数、保育室の面積に関する設問について、相対的に低く評価する傾向が見られ、トラブル発生の要因としてこのあたりに保育士の関心が向いていることを伺わせるものである。これは、前述の子ども1人あたりの面積や保育士1人あたりの園児数と危険値(トラブルの多さ)との間に相関関係が見出せなかったことと合わせて考えると、事実と意識にズレがあることを示唆していると考えられるのではないだろうか。

また、デイリープログラムについて、積極的にこれを変更しようとする保育所と、できる限り変更せず一定の流れを保つことを旨とする保育所が存在することが分かった。その視点を持って眺めると、下位グループにおいて変更頻度が高いという結果が確認できる。

クラス内のコミュニケーションや人間関係については、下位グループが比較的ポイントが高く、データ上では「相対的に、コミュニケーションが取れ、人間関係の整っている方がトラブルが起きやすい」という非常に興味深い結果が表れた。

【図10】



第3章 事例の考察とアンケートの再検討

1 アンケートのまとめと次のステップ

1回目のアンケート結果から、保育所の室内環境が保育理念や方針、それに基づき集団と個人のどちらの発達に重点を置いているかによって異なることが分かったため、2回目のアンケートではそれらの構成をより詳細に調査すべく、引っ掻きや噛みつきの頻度に加えて、室内玩具及び家具の種類と量、並びに保育者のトラブルに対する意識について調査を行った。さらに、アンケートだけでは表面化し難い保育形態などの詳細については、調査対象園に聞き取り調査を実施して情報収集に努めた。

これらのアンケート結果を分析すると、環境や人的配置の多様性に関わらず、トラブルの多い園でも少ない園でも、1歳児クラスに接触を伴うトラブルが際立って集中しているという事実は確認することができたものの、トラブルの発生因子やその抑止に効果的に働いているファクターなどを明らかにするまでには至らなかった。

そこで、本章では次なるステップとして、とくに引っ掻きや噛みつき事案が少なかった3か園を抽出し、1歳児クラスの午前中のコアタイム（10時から12時まで）をビデオ撮影し、事例考察を行うこととした。保育方針や保育内容に伴う物的及び人的環境構成等に注目しながら、各園における日常的な保育実践の様子を観察し、引っ掻きや噛みつき事案が少ないこととの因果関係について考察を加えた。なお、物的環境については、2回目に行った環境に関するアンケート調査の結果を数値化したものを参照しながら比較検討を行った。

2 3か園の映像による事例考察

以下はビデオ映像に納められた3か園の生活や保育の様子を紹介しながら、映像から読み取ることのできることを記載していくという作業結果である。

事例1 D保育園

〈施設概要〉

1歳児25人、保育士7人、保育室75.4㎡（1人あたり3.0㎡）

トラブル件数4月0件、5月2件、6月1件、合計3件

保育室のおもちゃの数43個、1人あたりのおもちゃの数1.7個

〈保育形態と生活時間〉

25人の子どもを通常2グループに分けて保育を行っている。午前中は半数の園児が戸外遊びを行い、半数の園児が室内にて保育されている。保育室は、食事、排せつ、遊びと活動に合わせた3つの空間に仕切られており、視覚的にも分かるようになっている。そして、部屋の半分以上が遊びの空間となっている。

室内遊びをしていたグループから先に食事を取り、その間、戸外遊びの半グループは戸外遊びを行っている。

〈映像考察—遊びの様子—〉

室内遊びは主に自由遊びを行っている。2人の保育士によって遊びが見守られており、遊びの空間にはマットで構成された粗大遊びのコーナーとキッチンのコーナー

が常時設置されている。

床の上に2枚のホワイトボードとマグネットを用意すると、5人の子どもが集まってきて3人が遊び始め、それを1人の保育士が見守る。しばらくすると2人の子どもがその場から移動してキッチンの方へ向かう。もう1人の保育士がマグネット遊びの隣の空間に2種類のハンマートイを用意すると、6人の子どもが集まり遊び始める。ここでは子どもの人数に対しておもちゃの数が足りていないため、2人が遊び4人がそれを見ている状況となる。見て待っている子どもの手がおもちゃに伸びるが、遊んでいる子が十分に遊べるようにその都度保育士がその手を制止し、順番を守るように子どもたちに伝えている。

いずれの遊びにおいても保育士の前におもちゃがあり、子どもが保育士とおもちゃの前に集まって遊ぶ姿が見られた。キッチンコーナー以外の遊び空間では、子どもが集まる場所には確実に保育士が配置されているので、子どもが何か危険な行動を起こしそうになっても、保育士の手がすぐに届き、トラブル発生に至るまでに問題を解決する体制が確立している。

〈映像考察—生活の様子—〉

食事の空間には大きめの6人掛けテーブル2台と椅子12脚が常時設置されており、前半後半の2グループがグループごとに揃って食事ができる。

7人の保育士がおり、活動の場所毎にそれぞれ担当と役割が決まっている。前半のグループが食事の時は、食事介助担当2人、午睡布団担当1人、排泄着脱担当1人、戸外担当3人である。後半のグループが食事の時は、食事介助担当に変更はなく、午睡布団、排泄着脱に戸外遊び担当であった3人が加わるようになっている。

食事の空間では各テーブルに保育士が1人ずつ配置され、調理室にてトレーに1人分ずつセットされた給食を食事担当者が提供している。食欲を促すため、はじめにお茶を口にさせている。食べることを嫌がる子どもが確認できたが、必要以上に食べさせることをせず、そのまま食事を終えて着脱へと促している。

食事が終わった子どもから順次パジャマへの着替えを行い、これを排泄着脱担当が世話する。午睡布団担当は、前半グループの食事中に遊びの空間に25人全員分の布団を敷いておき、着替え終えて布団のある場所へ移動してきた子を午睡担当の保育士が受け入れて午睡を促すという流れとなっている。

食事を終えた前半グループの子どもが午睡へと移行し始めると、後半グループの子どもが順次保育室に戻ってきて排泄を行う。戸外遊び担当の保育士は排泄着脱担当の保育士と一緒にこの介助を行う。前半グループの子どもが全員食べ終わるまで、排泄が終わった子どもたちは絵本を読んで待つようになっている。

〈考察結果〉

この保育園のトラブル発生件数は3か月で3件と非常に少ない。

保育士が7人配置されており、保育士1人当たりの園児数は3.6人と最低基準の6人を大幅に上回る基準にて保育が行われている。また、保育士の経験年数が比較的高く、3人の正規職員は16年目、2年目、1年目という構成、4人の非常勤職員は17年目（8時間勤務）、12年目（同）、40年目（4時間勤務）、13年目（同）という構成である。保育士の多さ、保育経験年数の長さが子どもの安全な環境構成に良い結果をもたらしていることは明瞭であるといえよう。

次に、D保育園の保育の特徴として保育士の周りで子どもが過ごす姿がよく見られた。遊びの場面では保育士の前にあるおもちゃで遊ぶ子どもたちの姿が確認できるし、生活の場面でも食事や排泄担当といった各保育士の担当する内容が決められているので、子どもたちの活動はいつも保育士の前で行われていることになる。

保育士が各々の持ち場で予め待ち構えていてくれるため、例えば、食事が終わった子はみんなが食べ終わるのを待つ必要がなく、次の活動場所では着脱や午睡の準備に取り掛かることができる。そして、子ども個々の生活時間に生じるタイムラグを上手く利用することで、ある特定の空間に子どもが密集し過ぎる状態がないことが分かる。

このように、遊びを含めたすべての生活場面において、子どもたちのほとんどの活動が保育士の目が行き届くところで展開されている。そのことがかなりの効果をもって引掻きや噛みつきトラブルの発生を抑止しているといえよう。このことは、この保育園の1歳児クラスのヒヤリハット件数が非常に多いことから説明できる。前述の通り、D保育園の1歳児クラスのトラブル発生件数は3か月で3件と非常に少ないが、ヒヤリハットの件数はその10倍にもあたる30件もあった。この保育園では未遂事案が今回の調査対象園の中で最も多く発生しているのである。

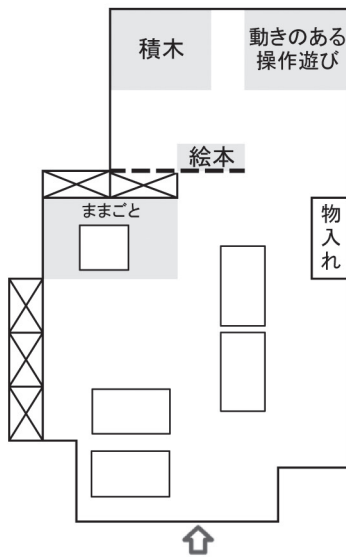
さて、D保育園の物的環境の数値を見ると、子どもの人数は25人と比較的多く、保育室内の1人あたりのおもちゃの量は1.7個と、調査した園の中では若干少ない（平均2.7個）数値となった。また、子どもが自らおもちゃを取りに行くのではなく、保育士がおもちゃを持ってきて提供する姿が見られた。子どもの人数とおもちゃの数が合っていないため、おもちゃで遊ぶ子どもとそれを待つ子どもがいることが確認できる。保育士は子どもたちに順番で遊ぶことを伝えるが、1歳児には理解が厳しいようで、手を出す子どもの姿とそれを制止する保育士の姿が確認できる。

保育室の面積は74.5㎡で、子ども1人あたりの面積にすると3.0㎡となる。最低基準を上回る数値ではあるが、現場サイドの感覚では特段に広いわけではない。し

かしながら、午前中は室内遊びと戸外遊びの2グループに分かれて活動するため、実質的には子ども1人あたり約6.0㎡の空間が確保できていることになり、十分広い空間が提供されているとみるほうが妥当であろう。もっとも、この園の特徴として、子どもたちは保育士の前に集まって遊んでいるので、保育室の一定の場所に子どもたちが密集していることが確認できる。D保育園においてヒヤリハット件数が非常に多くなっていることには、この「おもちゃの数」と「遊んでいる時の子どもの密集度」という因子が関わっているのではないだろうか。

この考察では、トラブル件数が非常に少ない一方で、ヒヤリハット件数が非常に多いD保育園は、保育士の配置人数や経験年数に加え、保育の流れの中での職員間の連動などの対策が優れていることがトラブルの未然抑止に成功している要因であるとみることができる。しかし、ヒヤリハットの件数が非常に多いことは、トラブルを引き起こす本質的な要因が解消されているわけではないことを物語っており、保育力によるトラブルの抑止に加えて、トラブル要因そのものを解消していくアプローチが必要ではないかと思われる。

D保育園 室内の環境



積み木コーナー

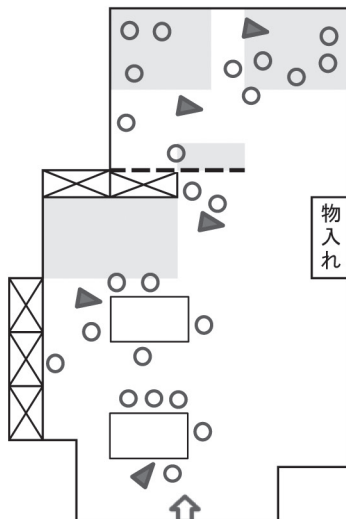


動きのある操作遊び



玩具棚

時間帯: 10:00~11:00



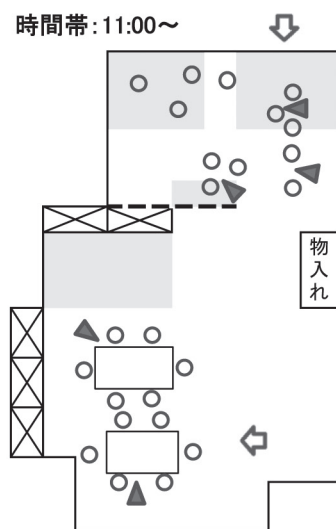
□ 机 (120cm × 90cm)

⊗ 玩具棚

▲ 保育士 二等辺三角形の頂角が保育士の向いている方向を示している

○ 子ども ↑ 子どもの動線 ↑ 撮影方向 矢印の方向から撮影

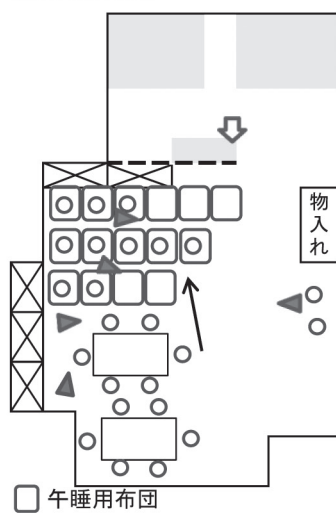
時間帯: 11:00～



※食事をしていないグループは、離れた空間で遊んでいる



時間帯: 11:30～



※グループごとに食事し、食べ終わった子どもから午睡。



事例2 J 保育園

〈施設概要〉

1 歳児13人、保育士3人、保育室55.6㎡（1人あたり4.3㎡）

トラブル件数 4月2件、5月2件、6月0件、合計4件

保育室のおもちゃの数85個、1人あたりのおもちゃの数6.5個

〈保育形態と生活時間〉

13人の1歳児クラスは4～9月生まれの子どものみで、10～3月生まれの1歳児とはクラスを分けて保育が行われている。室内にて13人全員が遊ぶ。保育室の一角に食事スペースが設けられているが、それ以外の部屋のほとんどが遊びの空間となっている。

子ども一人ひとりに合わせたデイリープログラムが設定されているので、一日の流れを見ると、遊ぶ子、食事する子、午睡する子といったように保育室内での活動が1つだけではない時間帯が存在している。子どもの生活リズムに合わせて一日の活動がプログラムされているため、例えば食事についてみても、全員が一斉に食べるのではなく、遊びをしている子どもの中から食事時間となった子どもを迎えに行き食事スペースにて給食を取るといった具合である。

〈映像考察—遊びの様子—〉

室内遊びは主に自由遊びが行われている。3人の保育士によって遊びが見守られている。遊びの空間はカーペットや柵などで視覚的にわかりやすいよう区切られており、柵には手作りのものも含めて操作の練習となる類の玩具が多く用意されている。机2台と椅子4脚が机上の遊び用に設置され、他には粗大遊び、ままごと、木製レールの構造遊びの玩具が常時設置されている。

子どもの手が届くところに玩具が用意されており、自ら選択して主体的に遊べる配慮がなされている。その選択肢は非常に多く、そのほとんどが1人で遊ぶためのおもちゃである。

椅子に座って遊ぶ子どものそばで保育士が小さな声で言葉掛けをしながら必要最小限の関わりを行っており、それは一緒に遊ぶというよりも見守りという感じである。遊びが選べない子へは保育士がモデルとなり意欲を刺激している。部屋の中ではみんなで遊ぶ姿や遊ぶ順番を待つ姿はあまり見られず、子どもが1か所に集まっていない。

定点観測で遊びに集中できていない子どもが3人ほど見られたが、その3人は粗大遊びの空間でよく遊ぶ姿が確認できる。じっくり座って遊ぶのが苦手な子どもでも、体を動かす粗大遊びの空間があることによって、何らかの選択ができるように配慮されていることが伺える。

〈映像考察—生活の様子—〉

食事の空間が部屋の入口のすぐそばに設けられており、遊びの空間の中心からは離れている。60センチ四方の正方形のテーブルが2台と椅子6脚が常時設置されており、そこに配膳等の用意をすべて完了させてから1人ずつ遊んでいる子どもを迎える形態である。

1つのテーブルで3人まで一緒に食事ができる。食事中は各テーブルに三角巾とエプロンをつけた保育士が1人ずつ配置され、保育士の位置、食べる前の手をふく手順、食事を口にする順番等細部に至るまで統一された保育士の動きが確認できる。スプーンで食事の介助を行い、1人あたり15～20分で食事を終了する。

食事の後は用意されているコットに子どもが自ら移動して午睡に入る。食事後の排泄は行われていない。食事から午睡に至る動線が短く、午睡前の着替えも衣服が汚れていない場合は基本的に行わないようである。

午睡ベッドは食事をしている子どもの数が順次用意される。食事を終えて午睡に入る子どもが増えていくと遊んでいる子どもは減っていくので、保育室の構成においても遊びの空間は時間を追う毎に小さくなり、反対に午睡の空間が広くなるという具合である。

デイリープログラムによって食事をはじめとする生活の順番が決まっており、子どもにも一日の生活の見通しが立っているためか、子どもたちの動きに混乱が少ないように見受けられる。

〈考察結果〉

J 保育園のトラブル発生件数は3か月で4件と少ない。保育士は3人配置されており、保育士1人あたりの園児数は4.3人で最低基準を上回る人員配置となっている。経験年数は正規職員が7年目と1年目、非常勤職員が5年目という構成であり、経験年数だけを見れば、保育経験が豊かな人的環境であるわけではない。

J 保育園の保育の特徴は担当制にあるといえる。個別のデイリープログラムを作成して、生活リズムに合わせて一日を繰り返し行うことによって情緒の安定が図られている。

1歳児クラスは2クラスあり、月齢によって4～9月生まれのクラスと10～3月生まれのクラスに分けられており、発達度がより近い子どもグループの中で個々の成長に沿った保育を行うことで子どもたちの情緒の安定を図るというアプローチがなされている。そこでは、生活の変化を最小限に抑える努力と不安を誘発する要素を取り除く試みが行われている。そのことは、毎日同じ保育士が、同じ場所で、同じ手順で、子どもたちの世話を担当することを通じて実践されており、映像にある子どもたちの姿からもその日々の積み重ねが十分に想像できる。

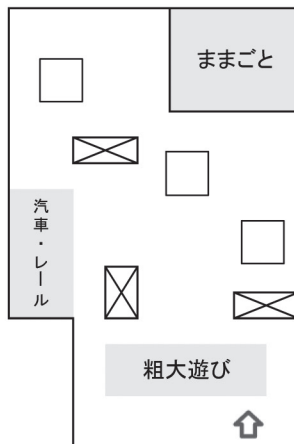
物的環境に目を転じてみると、1人あたりのおもちゃの量は6.5個と、今回調査した園の中で一番多い値とな

っている。J 保育園において特筆すべきは、このおもちゃの数の多さであろう。数に限らず、種類、配置場所、空間設定など、子どもが集中して遊びに取り組めるような工夫が、視覚的にも分かりやすい環境構成となって表れている。子どもが遊ぶ姿を観察していても、特定の場所に密集する様子があまり見られない。部屋には1人で遊べるたくさんのおもちゃが子どもの手が届くところに用意されており、いつでも子どもの欲求を満ちし応えられるような環境構成がなされている印象を受ける。

一方、この保育園は担当制を導入しているため、生活のあらゆる場面で子どもの活動が一斉ではない。そのため、遊び、食事、午睡の活動が混然一体となる時間帯が存在している。そのため保育室の空間もそれらの活動毎に区切られている。

13人の子どもに対する保育士の配置は3人で最低基準を上回る配置がなされているが、2人の保育士が4人の子どもの食事の介助に向かった場合、遊びの空間には、一時的ではあるものの、最大で9人の子どもを1人の保育士が見なければならない状況が発生することになる。それでも、J 保育園においては、トラブル件数にヒヤリハット件数を合わせても7件であり、トラブル発生リスクの高まる活動が流動的になる時間帯が毎日あるにもかかわらず、トラブルの発生を少なく抑えることに成功している。すでに見てきたように、その要因を保育士の経験年数や配置人数に結論付けすることは難しいように思われ、それよりもむしろ、子どもの毎日の生活リズムの安定とおもちゃ等の物的環境構成の充実という側面への配慮によるところが大きいのではないだろうか。

J保育園 室内の環境



- ✕ 玩具棚
- 机 (60cm × 60cm)



室内玩具棚

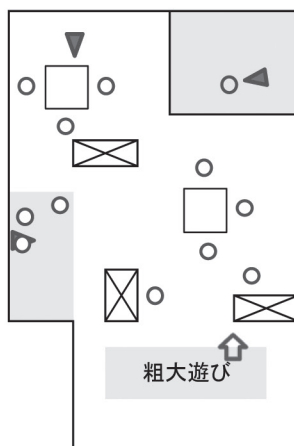


汽車・レール



ママごと

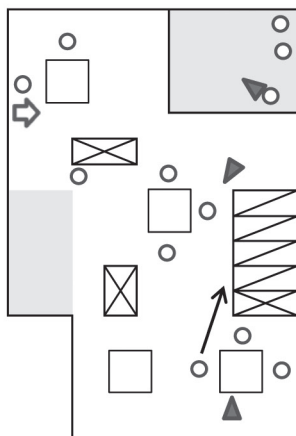
時間帯: 10:00~11:00



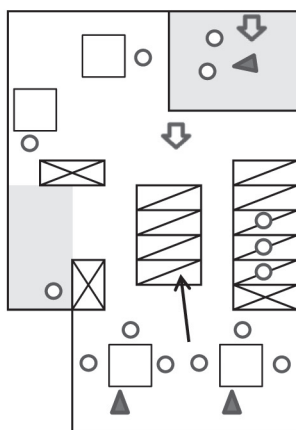
- ↑ 撮影方向 矢印の方向から撮影
- ▲ 保育士 二等辺三角形の頂角が保育士の向いている方向を示している
- 子ども
- ↑ 子どもの動線



時間帯：11:00～



時間帯：11:30～



事例3 N保育園

〈施設概要〉

1歳児15人、保育士5人、栄養士（食事時のみ1人）、
保育室65.0㎡（1人あたり4.6㎡）

トラブル件数 4月1件、5月3件、6月4件、合計
8件

保育室のおもちゃの数17個、1人あたりのおもちゃの
数1.2個

〈保育形態と生活時間〉

15人の子どもを2グループに分けて保育している。午前中は、戸外遊びから全員で保育室に戻り、グループ毎に遊ぶ。保育室はパーテーションで2つに区切られており、子どもたちはそれを超えて移動することはできないが、部屋全体が遊びの空間、保育の空間である。室内遊びを終えると食事へと移行し、遊ぶ場所とは異なる食事スペースへと移動する。

〈映像考察—遊びの様子—〉

保育室はパーテーションで2つの空間に仕切られている。15人の子どもが戸外遊びから帰ってくると、まず全員が衣服の着脱をし、終わった子から順に入口側の空間で絵本を読んで過ごす。もう一方の空間にマットを敷いてキッチンコーナーの設置が終わると人の子どもが移動して遊んでいる。

それぞれの空間には操作遊びとレール遊び、キッチンそのままと遊びが用意されている。子どもは区切られた空間を自由に行き来することはできない。保育士が2人ずつ配置され、それぞれの遊びを見守っている。いずれの遊びも保育士の前におもちゃがあって、子どもたちが集まって遊んでいるそばには必ず保育士がいて安全を見守る姿が見られる。

残りの3人の保育士は、食事の準備など、子どもの生活が滞りなく流れるよう次の活動の準備を連携しながら行っている姿が確認できる。

〈映像考察—生活の様子—〉

食事場所には0歳児クラスへの通路となっている空間を利用している。そこへ6人掛けテーブル3台と椅子15脚が食事前に用意される。この場所は保育室からは離れているので、子どもの活動を阻害することなく全員が揃って食事する環境を準備できる。

食事中は各テーブルに保育士が1人ずつ配置されている。食事は1品ずつ、子どもの食べる程度に合わせて提供されている。子どもが望めばパンやデザートのおかわりにも応じる。食事提供のタイミングはほぼ同じなので、終わる時間は大体揃う。保育士は子どもと一緒に食事をする。

食事をしている間に一方の空間に1人の保育士が15人分の布団を敷いていく。もう一方の空間はおもちゃが片

付けられて何もない広い空間となり、そこで子どもは着脱を行い、それを保育士2人が介助する。着替えた子は布団へ移動して午睡に入る。おもちゃは食事中にすべて片付けられており、午睡空間も着脱空間も十分な広さが確保されている。

〈考察結果〉

トラブルの発生件数は3か月で7件と少ない。

保育士の配置は時間帯によっては6人で、その時間帯の保育士1人あたりの園児数は2.5人と最低基準を大幅に上回っている。経験年数は比較的浅く、正規職員8年目、4年目、1年目、非常勤職員22年目（8h）、2年目（8h）である。

保育室の面積は65.0㎡で、子ども1人あたり4.6㎡と非常に広い。

以上のように、N保育園の特徴は、人的配置の多さと保育室の広さにあるといえる。その点がトラブルの少ない安全な環境を実現していると推測することは不自然ではないだろう。

映像を見ると、15人の子どもたちの活動の始まりと終わりはほとんど一斉に行われているが、この保育園にはそれに十分対応できる人と場所という環境が備わっている。子どもの遊びや世話を担当する保育士と次の活動を準備する保育士がいるため、一時的にも手薄な状況や子どもから目を離してしまうような状況が発生せず、活動が流動的になる時間帯も人的配置に不足が出ない。このように、人的な余裕、空間的な余裕、さらに保育士の動きも相まって生活の流れにも余裕が生まれているように見受けられ、これらが相互補完的に機能してトラブルが起こりにくい環境が醸成されているようである。

一方、物的環境の数値を見ると、保育室のおもちゃの数は17人分と調査した園の中では少なめである（平均は47人分）。子どもの様子を定点観測してみると、遊べていない子どもが半数ほど見受けられた。この日は主にレール遊びとままごと遊びが行われていたが、遊びに使用されるおもちゃを人数換算すると、レール遊びが4人分、ままごと遊びが4人分程度である。おそらくおもちゃは収納されているのだろうが、映像を見る限り、アンケート調査のおもちゃ量より実際に子どもの前にあるおもちゃの量は少なく、15人分の遊びの環境としてはおもちゃの数も選択肢も少ないといえる。

さらに、子どもの活動がすべて保育士の前で行われる事と遊びの選択肢が少ない事が、保育室の広さに関わらず子どもが密集する状況を形成している。そのため、室内は、おもちゃと子どもと保育士が密集している空間と人もモノもなく未使用の空間に分化されており、面積的には未使用空間のほうが大きい。

子どもの密集具合や遊べていない子どもの数、おもちゃや遊びの選択肢の少なさといった点を念頭に映像を見ると、保育士の数が減ったり、目を離す状況が生ま

れた時には、いつトラブルが起こってもおかしくない空間がそこにあるように思われた。映像ではモノの取り合いや順番争いが確認でき、アンケート調査には上がってこないヒヤリハットの因子を伺い知ることができる。

N保育園では総じて、遊び、食事、排せつ、着脱その他のすべての活動において多くの大人の目があり、大人の有効的な関わりによってトラブルが未然に防がれていると推察できる。しかし表現を変えれば、トラブル対策が人的配置や保育士の力という部分に大きく頼っているということである。結果的にトラブル件数は少ないが、保育室の有効的な使い方、子どもの満足感、トラブル要因の解消といった問題へのアプローチが今後必要になるものと考えられる。

3 比較検討

ここでは、3か園のモニタリング結果の比較検討を行ってみたい。保育活動（遊び）時間、食事時間、トラブル発生リスクの高まる保育活動から食事への移行時間における人的環境と物的環境を通した各園の配慮や取り組みについて比較検討してみた。

保育室で遊ぶ子どもの姿を30分間の定点観測で比較してみると、D保育園では12人中6人、J保育園では13人中10人、N保育園では15人中6人が集中して遊んでいた。なお、ここでは、子どもがしたいと思う遊びを、本人がしたいときに選んで、夢中になって遊んでいる状況が確認できた場合を「集中して遊んでいる」とみている。

D保育園では2個のハンマー玩具に6人の子どもが集まり、4人の子どもが順番を待っている場面があった。子どもは待ちながらも早く遊びたいからつい手が出る。その欲求を保育士が制止しなければならない状況が確認できた。ここでは、6人が待つことなく遊べるだけのおもちゃや遊びが用意されていたら、順番を待つ子どもの欲求を制止する保育士の姿はなかったのではないだろうか。

J保育園では、10人の子どもが机上や床上で自分のやりたいことにじっくり取り組んでいた。違う遊びがしたくなったら、これまで使っていたおもちゃを片付けて新しい遊びができる場所へ向かう子どもの姿が見られた。遊びを見つけれない子どもには、保育士がおもちゃを見せたりするなどして、子どもの遊びたいという意欲に働きかける姿が確認できた。

N保育園では区切られた空間で分かれて遊んでいるが、いずれの空間も遊びの選択肢が限られており、子どもの人数に比べておもちゃの数が少ないため、順番待ちや取り合いが生じ、それを保育士が制止する状況となっていた。保育室は面積的には十分に確保されているが、おもちゃのあるところや遊びの展開されているところに集まるため密集度が高く、保育士の配置によって常に見が行き届く状況となっていたものの、トラブル抑止への配慮が不可欠な状況となっていた。

3か園の子どもの人数を比べると大差はないが、映像に記録された音声から、J保育園が静かな印象を受ける。子どもの声も大人の声もほとんど聞こえず、大人の動きは小さく、走り回る姿や立っている姿も少ないためか、クラス全体が落ち着いた印象を与える。

遊びに集中している子どもが多いからクラスが落ち着くのか、クラスが落ち着いているから子どもが遊びに集中できるのか、映像からでは立証が難しいが、遊びへの集中度と落ち着いた環境との間には何らかの因果関係があるように思われる。そこで、我々は1つの仮説を立ててみた。その仮説とはこうである。保育室に子どものしたい遊びと十分な選択肢を用意することにより、まずは子どもの欲求が満たされる。次いで、保育者が子どもの遊ぶ場所や遊ぶ時間を十分に確保して見守ることにより、子どもは安心して遊び込むようになる。これらのことが結果的に子どもの情緒を安定させ、引っ掻きや噛みつき等の対人トラブルを減少させるのではないかとする仮説である。

今回調査したトラブル件数の詳細を見てみると、引っ掻きや噛みつきの生じる主な理由は、モノの取り合いと場所の取り合いであった。単純に考えれば、モノを取り合わなくて済むようおもちゃの数や種類を増やし、場所を取り合わないで済むようにじっくりと遊べる場所を確保して見守ることでトラブル発生リスクは減少するのではないか。また、遊びに満足できていない子どもを減らしていくことにより、トラブルの危険を予測しなければならない対象児数も減らすことができるとはいえないだろうか。今回の研究のコアといってもよい部分であるが、我々は子どもの生活する環境を上手く整備することで、トラブルの起こりにくい現場を構成することや、予防性の高い現場を構成することができるのではないだろうかと考えているわけである。

4 予防的観点からの検討

1歳児クラスに多く見られる引っ掻きや噛みつきは、子どもの自我の形成や発達に伴う行動であると考えられ、それらを未然に防ぐには、保育士の経験や人数などの人的環境の強化と家庭との連携強化こそが最重要であるというのが、これまでの先行研究がたどり着いた結論であった。今回の我々の調査結果からも、引っ掻きや噛みつきは1歳児クラスに多く見られる結果となった。そこで今一度、モニタリングした3か園の調査で得られた数値では表れない活動の流れについて、1歳児クラスにおけるトラブルの予防的観点から考察を加えてみる。

遊びと生活の場面において、D保育園は子どもの活動毎に担当の保育士を配置し、N保育園では子どもの活動時間を揃えることによって保育士が常に子どもに付き添える体制を確保していた。両者の保育は形態こそ異なるが、子どものそばに配置された保育士が表情や動きを見てトラブルを未然に防ぐ姿が見られた。噛みつきが予想

される子どもを集団から一時的に離したり、膝の上に乗せて関わるといった工夫も確認できた。

これらは従来行われてきた一般的なトラブル予防対策だといって良いと思われるが、多くの保育士を配置する必要がある。実際、この2か園も最低基準より上回る配置をし、保育士と子ども双方に負担をかけないように配慮されている。また、子どもの様子から先読みしてトラブルを未然に防ぐような高度なスキルが常に要求される。子どもの安全が保育士の数と個々のスキルにより水際で守られていることを裏付けているが、見方を変えると、子どもの安全が人的環境に極めて強く依存していると見られることもできる。

保育の担当制を採用しているJ保育園は、保育士の数が特に多いわけではないが、おもちゃ等の物的環境が豊富で、水際でのトラブル抑止より、子どもが落ち着いて遊び込める環境づくりを積極的に行っている。子どもが落ち着いて遊べる環境について考え、用意するおもちゃ、遊びの効果、配置する場所、子どもの動線など、様々な角度からのアプローチが見て取れる。

我々が問いたいこと、明らかにしたいことは、トラブル発生の危険性と室内環境との関係である。引っ掻きや噛みつきに関しては、すべてとは言えなくとも、室内環境や生活環境の整備によって未然に防ぐことができる部分があると考えすることはできないだろうか。今回の調査結果の検証からは、おもちゃの数が豊富で、保育士の配置も多く、保育室の面積も広いという素晴らしい環境があっても、それ即ち引っ掻きや噛みつきの起こりにくい環境であると論証することは難しい。それは明確に数値化できない部分なのかもしれない。しかし今回の検証では、環境構成によってトラブルが抑制されていると判断しうる事例が確認できる。おもちゃの数だけではなく、配置の仕方も含めた環境構成によるトラブルの抑制力が十分に考えられる。おもちゃをはじめとする物的環境を用意し、それらが日々の保育と連動することで子どもの姿をどのように変えていけるだろうか。そこには、子どもたちが落ち着いて夢中に遊び込む姿が、保育の狙いとして見え隠れしている。

さて、遊びだけが保育時間ではない。食事や排せつ、午睡など、生活に関わる時間があるのも保育園の特徴である。この生活に関わる時間の中でもトラブルは起きている。今回の調査でも、遊びから食事への移行期にトラブルが発生しやすいという結果が出ている。みんなで一緒に遊び、みんなで一緒に片づけをして、みんなで一緒にご飯を食べる。どれも保育園という集団生活の場では特別なことではないが、これらの活動の移行時にトラブルが起り易いのは、活動の変化に対応できない子や先の活動で欲求が満たされていない子がいるからとは言えないだろうか。

考えてみると、活動が変わるときは子どもに気持ちの切り替えを要求するものであるが、そうであるにも関わ

らず、このタイミングは子どものそれではなく、時間的な要請や大人側の都合によるところがある。だとすると、子どもがその時まさに感じている欲求は無視されて抑圧され、その子が真に求める選択肢を奪ってしまっていることになる。それが結果的にトラブルを引き起こす要因となっていると考えることができる。もちろん、もう少し遊びたいという子どもの気持ちをすべて汲み上げるとは、集団行動が要請される現場では難しいのも事実である。集団生活する中での個への対応は言葉にする以上に難しいことであるが、その実践で子どもの情緒が安定する保育が実現できるならば、トラブル発生のリスクの高い時間帯にも落ち着いた環境を作ることができ、引っ掻きや噛みつき事案の減少に寄与できるのではないだろうか。いつでも子どもに寄り添い、個々の子どものリズムに合わせて関わるのが重要な要素であるように思われる。

J保育園が担当制保育を採用している狙いは、生活場面における子どもの情緒の安定にある。担当者、場所、時間、順番、手順などを極力変えることなく毎日同じように数人ずつ世話をする。保育室の中では遊び、食事、午睡の3つの活動が並行して行われていく。室内には大勢の子どもがいるが、集団行動が要請されることはない。個々の子どもに合わせて生活時間が組み立てられており、毎日の変化が非常に少ないため、子どもは繰り返しの生活を通して少し先の未来に見通しが立つ。このことが子どもの活動から不安感を取り除き、安定した生活リズムを保つことにつながっている。みんなで一斉に次の活動に移らなければならないという状況が少ないため、保育士も個別の対応を取りやすいというメリットがある。

もっとも、担当制保育もリスクの生じる部分はある。集団で活動を切り替える保育の場合は、みんなで片付けてみんなで食事をするため、活動が揃っていて、保育士は活動の流れに付き添いやすい。また、活動毎に保育士を配置するといった工夫により、いつも子どものそばに保育士を配置することができ、子どもたちは多くの大人の目に守られながら次の活動に移ることができる。一方、担当制を採用するJ保育園では、同じ室内で複数の活動が同時進行する時間帯が生じるため、時間帯によっては1人の保育士が多くの子どもを見守る状況が発生する。

実際には、保育士が手薄になる時間帯においても、トラブルの発生は少ない（事実、J保育園では毎日そのような状況で保育が行われている）。保育士の数だけが引っ掻きや噛みつきの処方箋ではないことを示すものである。子どもが満たされ、落ち着いて遊ぶことができているれば、実は大きな混乱は生じないものなのである。この事例は、保育において人的環境以外の要因が、即ち物的環境が効果をあげているといえる事例である。これにD保育園やN保育園のような人的環境整備が加われば、もっと大きな効果が確認できるかもしれない。

このように検討してみると、引っ掻きや噛みつきの予

防は、必ずしも人的な環境、即ち保育士個人の能力にのみ頼るしかないわけではないことが見えてくる。また、人的環境という場合も、トラブルの瞬間への保育士の直接的な関わり以上に、一連の活動を見通した事前の配慮、即ち間接的な関わりにこそ問題解決の糸口があるように推察できる。

保育園が、園独自の工夫ある取り組みと環境構成へのこだわりにより、保育環境を整えていくことは、保育士の専門性や質の向上にもつながるものと考えられる。それは、保育士個々のトラブル予測能力を向上させるということよりもむしろ、子どもの情緒を安定させ、集中して遊び込める空間を如何にして構成するかという狙いを持った環境構成を通じて実感されるはずである。

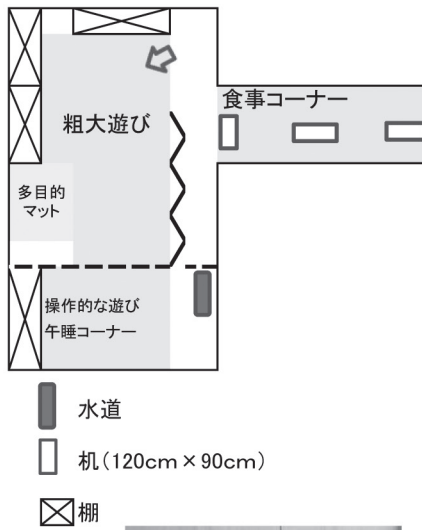
遊びの空間に落ち着いた環境を構成するには、少なくとも豊かな物的環境が必要不可欠でなる。また、生活の空間には子どもの生活リズムに合わせた流れを確保することが必要といえる。保育環境に焦点を当て、物的環境と連動して人的環境を取り上げるとき、より重要なのは、保育士の数や経験年数よりもむしろ、保育士に、あるい

はその保育園に、これらの環境構成を行えるだけの配慮や狙いが明確となっているか否かという部分ではないだろうか。子どもが落ち着いて活動できない環境下では、おもちゃや家具、時間や空間が有効に機能することはないだろう。

我々は、保育において人的環境はもちろん重要であると考え、それと同程度に物的環境の力や子どもの遊びの力を信じている。それ故に、子どもが満たされて落ち着いた環境を構成することが、保育現場の引っ掻きやかみつきのトラブルの防止に活用できるのではないかと考える。

引っ掻きや噛みつきの抑制を考えると、子どもの行動を予測した保育士の介入による制止は最終的な対処法であって、子どもの情緒を安定させ落ち着いて過ごせる環境を構成することこそが最大の予防法であるとは言えないだろうか。我々は、この2つが並列してあることが、今後、保育現場での引っ掻きや噛みつきトラブルの削減に効果を発揮するのではないかと予測している。

N保育園 室内の環境



室内玩具棚



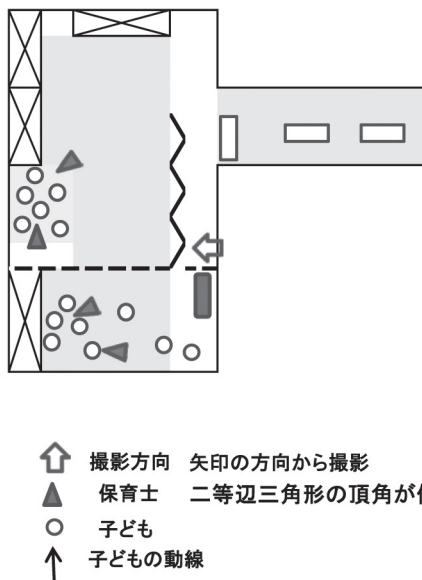
ままごと



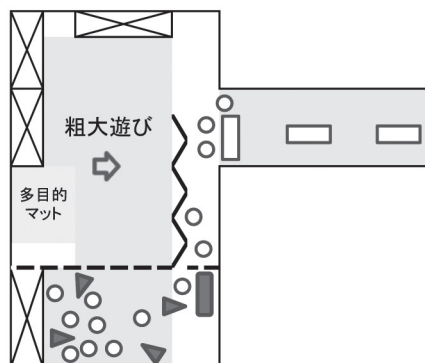
操作的な遊びスペース

※多目的のマットは、時間によってままごと遊びや絵本読み聞かせの場所となる

時間帯: 10:00~11:00



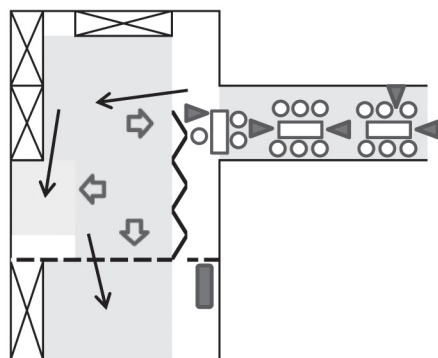
時間帯:11:00～



※手洗いを済ませた子どもから席に着く



時間帯:11:30～



※一斉に食事をおこなう
※食事時には、栄養士が補助に入る
※職員は、子どもと一緒に食事をおこなう



※食事を終え、着替えをした子どもは絵本コーナーへ



※絵本の読み聞かせ後、午睡スペースにて入眠

総合考察—新たな課題の始まり—

本研究は、乳児保育について、人と物という2つの視点から、環境と引っ掻きや噛みつき等のトラブルの相関関係に着目し、それらを分析することで経験則や勘などに依存することなく、保育環境を通してトラブルの動機を抑止し、毎日の保育の安心安全につなげることが目的であった。

今回の研究で改めて確認できたことは、乳児保育においては、保育の形態や方法に関係なく、どのような保育園においても対人関係トラブルが発生することである。また、保育環境の違いや生活リズムの変化によってもトラブル発生頻度が左右されることが分かった。さらに、物的環境はトラブルの発生における主要な因子であるものの、その配置や扱い方、そして保育士の配慮といった総合的視点が最も重要であり、それらが、情緒の安定や真剣に遊び込むという子どもの姿へと繋がっていくことが明らかとなった。

おもちゃや家具といった保育ツールは、その数量に最大効果はなく、質感、色、大きさ、設置の仕方、それを使う空間の確保、生活動線といった高い専門性による選択が求められる。

そして、アンケート調査から始まり実際の保育現場を考察したことで得られた最大の成果は、大別すると噛みつきや引っ掻き等のトラブルが高度な次元で2つの形態により抑止されているという事実の発見である。それが「かみつかなくてもいい保育」と「かみつきを防ぐ保育」である。

「かみつかなくてもいい保育」とは、保育士（保育園）がモノやその空間、時間に至るまで環境へ構造的に働きかけることにより、トラブルそのものの発生を低く抑えているものである。それは、子どもたちが安心して、じっくり遊び込む姿が象徴している。また、情緒の安定という面では、担当制に代表されるような特定の大人（保育士）と子どもが同じ時間を同じ場所で密接に生活するという秩序性が強く因果関係を結んでいると言えそうである。

「かみつきを防ぐ保育」とは、豊かな職員配置や経験、そして成熟した保育技術によってトラブルを未然に防いでいるものである。これは、トラブル件数が少ないけれどヒヤリハット件数が多いという事例に見ることができる。

いずれの形態も、トラブル件数が少ないという共通点から質の高い保育と言えるが、数値上から識別することは極めて難しい。調査件数が少なく妥当性の低さはあったものの、アンケート数値からトラブルの発生因子をほとんど特定できず、複数の保育実践を映像によって比較することで初めて表面化したことでも、その複雑性を窺うことができる。また、これらは個々の要素が独立して効果を生みだしているものではなく、それぞれが複合的

に連関し、それが子どもや保育士の内面に働きかけ、またその変化が新たな環境を創出するという相互作用によって成熟していく保育の特性を反映しているとも言える。

だからこそ、「かみつかなくてもいい保育」と「かみつきを防ぐ保育」のどちらに優位性を見いだすのではなく、両者を包括していることを理想とし、さらに言うならば、その順序こそが安全安心へと繋がる最大のファクターとなることを本研究の結論としたい。つまり、トラブルが起こりにくい保育環境のなかで、乳児の発達過程において必ず起こりうるトラブルを可能な限り未然に防ぐことが、これら問題の本質的な解決となりうるのである。

今後の課題としては、調査項目を精緻化して回答数を増やし、実効性のあるデータにしてこれを検証すること、異なる保育形態や保育手法間でのさらなる比較検討、子どもの保育環境への関わり方や遊びへの集中度の観察等を通じて、あるべき保育環境が子どもの内面を安定させ、そのことが子どもの発達や活動にどう影響していくのかについて複合的に検討していく必要がある。

最後に、G3保育環境研究会は各地域で展開される様々な保育の是非かではなく、今あるものに、更なる保育要素を環境という側面からプラスしていく「環境プラス」によって子どものより豊かな育ちへ働きかけることを提起して本研究を締めくくりたい。

参考文献

中村 尋子・北野 哲也・藤岡 佐規子・八木 義雄・山下 満子『保育所児におけるかみつきの研究』
藤岡 佐紀子・八木 義雄『保育所児におけるかみつきの研究』

別紙〈室内のおもちゃ環境を数値化する条件〉

- 1、子どもが手の届くところに用意されたおもちゃのため、他の遊びと並行して遊びが行われると仮定しておもちゃの機能だけではなく遊ぶ空間も含めて想定人数を導き出す
- 2、操作練習できる遊びは基本的にはおもちゃの数をそのまま人数分と換算するが、素材の数が多い時はおおむね上限を4人分とする
- 3、操作練習遊びで、チェーンや素材の量が多く集計が困難なものは、「遊び」の数ごとに換算することがあり、同じ遊びをまとめて上限の4人分とすることがある
- 4、例えば電話、携帯、などは個数ではなく「電話遊び」で換算し、上限を4人とする。他の細かいおもちゃも同様に考える
- 5、ままごとの料理ごっこ遊びに使用するキッチン、ナイフ、鍋などは「ままごと遊び」として、全部で4人分と換算する。
- 6、ままごとの具材、皿、スプーンなどはその個数ごとに人数分とするが、それぞれ上限を4人分とする
- 7、人形は「人形あそび」として考え、ミルクやブラシなどの付随するおもちゃは換算せず、人形1体で1人分と換算する。
- 8、食事以外のお風呂遊びなどのごっこ遊びになる具材は、それぞれ「〇〇遊び」の数ごとにおもちゃの数を人数に換算し、上限を4人とする
- 9、ブロックは基本的には1箱または1種類で3人分と換算するが、量が少なすぎる場合はこの限りではない。
- 10、箱積み木は1箱で1人分と換算する。ネフ等の一人遊びの積み木も1箱で1人分と換算する
- 11、大型積み木は、滑り台などの「粗大遊び」として1種類で3人分に換算する
- 12、恐竜、動物、車などの小さなおもちゃは個数を人数分とするが、上限4人で換算する
- 13、汽車は汽車あそびとしてコンテナ1つで3人、量によっては上限5人で換算する
- 14、布・プレイクロスは枚数を人数分とするが、上限として3人
- 15、落とすおもちゃは落とすパーツや具材で換算せず、受ける器の数を人数分として換算する
- 16、ニックスロープやカースロープのような動きを楽しむおもちゃは、動かすおもちゃの数ではなく、本体の数を1人分として換算する。
- 17、お絵かきは絵の具などの描くおもちゃを全て合算して「お絵かきあそび」として4人分と換算する。粘土、粘土べら等も同様「粘土遊び」として4人分と換算する
- 18、パズルはおもちゃの数をそのまま人数分と換算する
- 19、ボールは個数をそのまま人数分に換算するが、上限5人分と換算する
- 20、モビールは0歳クラスのみ個数を人数分に換算するが、1～2歳は換算しない
- 21、絵本は冊数を人数分に換算するが、上限5人分とする
- 22、ひも通しは1個を人数分換算するが、1箱の場合は3人分に換算する
- 23、ゲーム類は内容に合わせて1つで2～4人分とする
- 24、牛乳パックの積み木は20Pまでは1人分、それ以上は2人分とする
- 25、楽器類はその個数を人数分とするが、上限4人で換算する
- 26、換算が難しいものはその都度話し合いを行い、他基準と大差ない結果となるよう調整し換算する。